論文審査の要旨

報告番号	総研第 251 号		学位申請者	喜井　裕哉
審査委員	主査	黒野　祐一	学位	博士（医学）
	副査	河野　嘉文	副査	橋口　照人
	副査	野村　裕一	副査	中尾久美子

Long-term intraocular pressure changes after combined phacoemulsification, intraocular lens implantation and vitrectomy

超音波乳化吸引術・眼内レンズ挿入術・硝子体手術後の長期の眼圧変化について

硝子体手術は広く行われている手術であり、2006 年に Chang は硝子体手術後の後期合併症として続発緑内障を報告した (Chang S. Am J Ophthalmology: 2006)。一方、日本では硝子体手術と同時に白内障手術である超音波乳化吸引術・眼内レンズ挿入術を行うことが多く (白内障・硝子体同時手術)、白内障手術後は長期にわたって眼圧が下降することが知られている。しかし、白内障・硝子体同時手術における眼圧変化についての報告は少ない。そこで今回、白内障・硝子体同時手術後の眼圧変化を 5 年間にわたり後ろ向きに調査した。

【対象および方法】

2001 年 12 月から 2005 年 3 月に、特発性黄斑円孔または特発性網膜前膜に対し白内障・硝子体同時手術を行い 1 年以上経過観察できた連続 85 例 85 眼の後ろ向き研究を行った。内眼病変のある症例、眼圧に影響する術中合併症が生じた症例、僚眼に内眼手術既往のある症例を除外した。これらの症例に対して、各経過観察時に非接触型眼圧計で眼圧を測定し、術後 3、6、12、24、36、48、60 か月に術眼と僚眼の眼圧を比較した。また、各経過観察時の眼圧を術前と比較した。

【結果】

平均年齢は 66.2 歳で、男性 23 例、女性 62 例、平均経過観察期間は 21.9 か月であった。疾患別では、黄斑円孔 44 眼、黄斑前膜 41 眼であった。経過中に眼圧が 21 mmHg を越えたのは 2 例 3 眼のみで、追加治療なしで 21 mmHg 以下に下降した。術前の眼圧は、術眼と僚眼で有意差を認めなかったが、術後 3 か月で術眼は僚眼より 1.17mmHg 低く、有意差を認めた。しかし術後 3 か月以降は有意差を認めなかった。術前との比較においても、術眼眼圧は術後 3 か月で有意に低下し、術後 3 か月以降は有意差を認めなかった。さらに、術後 3 か月と 12 か月で、術前と術後の眼圧比 (術眼眼圧／僚眼眼圧) の相関を調査したところ、術前と術後 3 か月の比較において相関を認めなかったが、術後 12 か月において相関を認めた。

【考察】

白内障・硝子体同時手術は術後 3 か月で、術前および僚眼と比較して眼圧を約 1mmHg 下降させた。しかし、術後 6 か月以降は、術前と有意差を認めなかった。続発緑内障発症の危険性の観点から、白内障・硝子体同時手術は、安全性の高い手術と思われる。しかし、眼圧が上昇する症例もあり、術後の慎重な経過観察が必要である。

本研究は、白内障・硝子体同時手術後の眼圧変化を検討したものであり、その結果、白内障・硝子体同時手術が、安全性の高い手術であることを示した点で非常に興味深い。よって本研究は学位論文として十分な価値を有するものと判断した。